



第7部

S G H指定終了後の課題と展望

第7部 SGH 指定終了後の課題と展望

第1章 課題

1. タイ・フィールドワーク

<タイ・フィールドワークの課題設定について>

実際にフィールドワークに赴く前に、事前に文献等を調べ、先行研究の調査を行っている。しかしながら、実際に現地に赴き調査をする際に、課題設定によっては調査の実現性が低いケースや、リサーチクエスションの妥当性が低いものなども、フィールドワーク中やフィールドワーク後に気づき修正を行うケースが散見された。

生徒は、帰国後にテーマを変更するケースがあったが、そもそもどんなに文献で調べていても課題設定は実際には現地に行った後でないと難しいとのご指摘も専門家から頂いた。一方で、ある程度絞込みをしておかなければ、フィールドワークそのものが有効なものとならないのではないかとのご指摘もあった。

<期間について>

海外フィールドワークの期間そのものが二週間という短い期間で実施されるため、異文化理解は十分にできるものの、調査という観点から考えたときやはり短いのではないかと思う。

しかし、これ以上期間を延ばすことは難しいので、何らかの工夫が必要である。

<調査方法>

調査の仕方に関しても、ここ二年間は量的調査に重きをおく傾向にあったが、有効な回答やデータを得られないため、質的調査もするよう指導すべきだという議論もあった。しかし、タイでは英語がツールとなるため、調査する相手が英語を話せない場合や生徒達の英語力が低い場合は、通訳が必要となり直接調査の結果を得ることが難しく、その点でも課題が残った。

2. 論文指導

1年次より国際文化の授業でシラバスを作成し、2年間の中で体系的な指導を整えたが、一人の担当教員が3年間継続して指導を行うことは難しく、結果として一貫性のある指導とはならなかった。平成28年度より課題研究メソッドのテキストを利用して指導をしているが、生徒の課題研究に対する着眼点は異なることは避けられなかった。

このような課題から、平成30年度より一人の生徒の課題研究に関して複数の教員が集まり、生徒の課題研究の指導方法を共有することにより、課題研究を指導する上で一歩前進したといえる。質の高い論文指導を行っていく上で、このような観点は必要だが、今後指導する対象の生徒が増えていくため、どのようにこの課題を解決していくかは時間を要する。

3. 日本スリランカ青少年交流

民族や文化や宗教の異なる青少年が参加し、本校の生徒と交流を行うという点において、SGH 指定の期間の中で大変実りあるプログラムとすることができた。

しかしながら現地でフィールドワークを行い、その後課題研究をするという観点においては、かなり難しかったといえる。やはり課題研究を生徒達が行うためには、体系的な指導が必要であり、かつカリキュラムに組み込む必要があったといえる。ただし、課題研究を行うことだけが自律的なキャリアプランを形成することにはならず、スリランカの青少年との交流を通じて、スリランカの文化に興味を持ち、ロンドン大学 SOAS 校で学びを深めたいという自律的なキャリアプランとつながったケースもあるため、プログラムによっては必ずしも海外フィールドワークと課題研究に結びつける必要はないのかもしれない。

4. 他の SGH 校との連携

生徒達の課題研究を披露する機会を公的な大会以外で提供する事ができなかった。

他の SGH 校との連携等を深め、生徒間の交流や課題研究を発表し、学びあう機会が少なかった。中国宋慶齡プログラムは ICU 高校も参加しており、日本文化の発表をする際に協力して練習を行ったが、それ以外のプログラムに関しては実施できなかった。

5. 海外フィールドワーク

本校では海外でのフィールドワークや研修を行っている。平成 27 年にタイのフィールドワークを実施する前にバンコクで爆破事件があり、実施するかどうかがかなり検討を重ねた。平成 28 年には SG クラス 1 期生のロンドン研修中に、ロンドン郊外でテロがあった。郊外であったため本校の生徒には影響はなかったが、同年の夏に実施予定だった高校 2 年生の英国修学旅行は中止になった。平成 29 年にはスリランカでデング熱が流行し、夏の研修は延期となった。このように国際情勢等の影響を受ける事が多かった。

6. シドニー大学研修

今年度も昨年度と同様に、研修内容における問題点というよりは、シドニー大学側の担当者との連絡のやりとりに関して難しさを感じた。研修実施の数ヶ月前に講義や研修の内容の要望をだしていた。しかし、担当者が毎年替わり、確認がとれたのは実施の直前となるなど、大変な時間がかかった。

実際の研修では初日に NGO の代表の方より講義があったが、講義を聴く際に必要となる NOTE-TAKING のスキルを学ぶ前に講義を受講することになってしまった。この点は改善点として大学側にリクエストしていたが実施していただけなかったことの一つである。このことをふまえ、今年度の現地での打ち合わせでは要望としてシドニー大学側に提案した。

また、本校の教員がこの 4 年間のシドニー大学での引率の総括の中で、現在はシドニーで研修を行っているが、生徒達は一年間の留学中、ニュージーランドでのフィールドワークを基に課題研究を行うため、実際にニュージーランドに住んでいる専門家からご指導を頂く方がより有効なアドバイスを得られるとの見方もあった。

第2章 展望

1. 全校での探求型学習の取り組み

2019年度・2020年度の探求学習

2019年度新生より全生徒が課題研究の基礎技能を習得し、自ら設定したテーマに基づいて地域社会や国際社会の課題を調査することになった。

一年次は課題研究の基礎技能を習得する学年と位置づけ、「課題研究入門」として段階的に学べるよう、テキストも1学年共通で使用し実施する。12月にフィールドワークを行い1月にポスターセッションを行う。二年次はコースごとに取り組む内容を変え、進学コースは(株)教育と探求社が提供するクエスト企業探求を行う。企業から出されるミッションに取り組む。

特進文理コースは課題研究ゼミを行い、少人数制ゼミで各自の調査研究を進め、論文を作成し、研究発表会を開催する。

2019年度探求学習シラバス (予定)

【高校1年次】

	授業日	実施内容	
一学期	1	4月20日	
	2	4月27日	
	3	5月18日	
	4	6月8日	序章 課題研究に取り組む前に
	5	6月15日	第1章 情報を集めよう (図書館実習含む)
	6	6月22日	
	7	6月29日	第2章 文章を読もう
夏休み			
二学期	8	9月14日	第2章 文章を読もう
	9	9月28日	第3章 問いを立てよう
	10	10月12日	
	11	10月19日	第4章 研究テーマを決めよう
	12	11月2日	
	13	11月9日	第5章 リサーチクエストと仮説を立てよう
	14	11月16日	
	15	11月30日	終章 調査・実験を行い、研究内容を発表しよう
冬休み (自宅学習期間)		フィールドワーク	
三学期	16	1月11日	GPS-Academic 受験
	17	1月18日	ポスターセッション準備
	18	2月8日	
	19	2月15日	ポスターセッション
	20	2月22日	
	21	2月26日	【LHR】ポスターセッション学年大会
	22	2月29日	予備日

【高校2年次】

	課題研究 (特進文理コース)	QUEST 企業探究 (進学コース)
3月	ゼミ一覧配信と履修登録	
4-6月	ゼミ開講 オリエンテーション 研究テーマの検討と確定 各自の調査研究活動	学級ごとに「企業探究コース」Step1～7を進める 企業から先生が派遣される日も設ける
夏休み	調査研究活動とポスター作成 (教員の裁量によりゼミ合宿開催)	
9月	中間評価用ポスター提出 優秀作品を文化祭で展示	「企業探究コース」Step8～12 プレゼン準備
10-11月	論文作成 一次提出	
1月	GPS-Academic 受験	
1-2月	ゼミ内で批評会 最終提出	学級ごとにプレゼン大会 QUEST CUP
2月	課題研究発表会	

2. SG クラス理系新設

平成30年度にはスーパーグローバルクラスに従来の文系型のカリキュラムだけではなく、文理横断型の学びを推進していくため、理系のカリキュラムを設けた。国際的な感覚をもち、明確な専門分野を持つことで、より国際社会で活躍できる人材を育てるためである。カリキュラムは以下のとおりである。

★ 特進文理コース ★

(文理クラス・メディカルクラス・スーパーグローバルクラス)

・文理クラス・メディカルクラスは国立大学・難関私立大学進学を目指すクラスです。文系・理系に偏らない総合的な学力を身につけることができます。

・スーパーグローバルクラスは海外大学や国際的に重点を置く大学へ進学を目指すクラスです。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	
高1 (4年)	文理	国語総合⑤	世界史A②	日本史A②	数学I③	数学A②	生物基礎②	化学基礎②	体育③	保健①	芸術②	コミュニケーション英語I③	英語会話①	英語表現I②	社会と情報②	総合①	LHR																						
	メディカル	国語総合⑤	世界史A②	日本史A②	数学I③	数学A②	生物基礎②	化学基礎②	体育③	保健①	芸術②	コミュニケーション英語I③	英語会話①	英語表現I②	社会と情報②	総合①	LHR	特設数学②	特設理科②																				
	SG	国語総合⑤	世界史A②	日本史A②	数学I③	数学A②	生物基礎②	化学基礎②	体育③	保健①	芸術②	コミュニケーション英語I③	英語会話①	英語表現I②	社会と情報②	総合①	LHR	特設英語②	国際文化②																				

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	
高2 (5年)	文系	現代文B③	古典B②	日本史B④	世界史B④	現代社会②	数学II④	数学B②	物理基礎②	体育②	保健①	家庭基礎②	コミュニケーション英語II④	英語表現II②	英語会話②	総合①	LHR																										
	メディカル・理系	現代文B③	古典A②	化学④	現代社会②	数学II④	数学B②	物理基礎②	体育②	保健①	家庭基礎②	コミュニケーション英語II④	英語表現II②	英語会話②	総合①	LHR	特設数学②	特設理科②																									
	SG文系	現代文B③	古典B②	世界史B④	現代社会②	数学II④	数学B②	物理基礎②	体育②	保健①	家庭基礎②	コミュニケーション英語II④	英語表現II②	英語会話②	総合①	LHR																											
	SG理系	現代文B③	古典A②	化学④	現代社会②	数学II④	数学B②	物理基礎②	体育②	保健①	家庭基礎②	コミュニケーション英語II④	英語表現II②	英語会話②	総合①	LHR	特設数学②	特設理科②	国際文化②	異文化研究I②	(タイ研修)																						

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41			
高3 (6年)	文系	現代文B③	体育②	コミュニケーション英語III④	世界史B④	日本史B④	英語表現II②	古典B③	総合①	LHR	演習世界史③	演習日本史③	政経・倫理③	数学I②	数学II②	生物基礎②	化学基礎②																											
	メディカル・理系	現代文B③	体育②	コミュニケーション英語III④	生物④	物理④	英語表現II②	数学I③	総合①	LHR	数学II③	演習化学③	演習生物③	演習物理③	数学III⑤	古典②	政経②																											
	SG文系	現代文B③	体育②	コミュニケーション英語III④	世界史B④	英語表現II②	古典B③	総合①	LHR	演習世界史③																																		
	SG理系	現代文B③	体育②	コミュニケーション英語III④	生物④	物理④	英語表現II②	数学I③	総合①	LHR	数学II③	演習化学③	演習生物③	演習物理③	数学III⑤	古典②	政経②																											

※ □は必修選択科目です。

※ □は自由選択科目です。

※ 高3(6年)数学I、数学IIの授業は数学IA、数学IBです。

※ 卒業までに修得する最低単位数は文系85単位、メディカル理系93単位、SG文系99単位、SG理系100単位です。(LHRは含めません)

※ スーパーグローバルクラスの異文化研究Iはタイでの研修、異文化研究IIはロンドンでの研修です。

※ 教育課程表は変更されることがあります。

スーパーグローバル理系設置。平成31年度入学生より適用

3. 21 世紀型教育の推進

21 世紀教育に求められている、課題を様々な角度から多面的に考える批判的思考力 (Critical thinking)、他者と円滑に協働する力 (Collaboration)、そのためのコミュニケーション力 (Communication)、独創的なアイデアを生み出す創造力 (Creativity) いわゆる 4 つの C と言われている。このような力を身につけるため、以下 3 点に関して実現化できるようにしていきたい。

1) カリキュラム編成

新学習指導要領に向けて、カリキュラムを組む際に中学から高校までの段階的な探求学習のシラバスを考える必要がある。また探求学習の時間を教科横断型の学習の時間とし、学期ごとにテーマを設定し、一人の教員だけでなく複数の教員が一つのテーマに異なるアプローチをしていき、生徒が多面的に考え、最終的には ICT をツールとして Output できるようなカリキュラム編成をしていく。

2) 国際感覚を身につけさせ、多様性を受け入れる学校

本校では元より国際交流活動が活発であるが、留学生の受け入れに関しては発展途上である。今年度、アジア架け橋プロジェクトでタイの学生の受け入れをしたことにより、他の生徒に大変良い影響を与えた。今後もこのような取組は継続し更に発展をさせる。具体的には期間の延長や受け入れ人数など検討をしていきたい。

本校では高校留学に関しては長年かけてシステムを構築してきたが、海外大学への進学者は微増しているものの、生徒と保護者も様々な理由によりまだ足踏みをする傾向がある。学校として海外大学進学者に対応できるような体制作りを次年度より徐々に整えていく。

3) 地域・保護者・NGO・大学との連携

5 年間の研究開発の中で、多くの NGO や大学関係者の方々の御蔭で SGH のプログラムが成立し、活性化してきた。このような関係者の講演や講義を通じて、Critical thinking の力を付けることができた。今後も継続して協力を仰いでいく。

開かれた学校を目指し、保護者による講演会や保護者の職場でのボランティア体験の機会など依頼し、保護者と学校が一体となり生徒を教育していく環境づくりをしていく。

今年初めて行われた近隣の中学への出張授業では本校の生徒が中学生に自分たちが SGH プログラムで得た知識や経験を基に、ワークショップを行った。中学生にとっても本校の生徒にとっても学びが深く、また地域に根ざした教育活動ともいえる。地域貢献となるような活動を今後も取り組んでいく。

(第 7 部文責：宮川典子)